岩手県立博物館
IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション 〈2010.12.1～2011.3.31〉

展覧会

■テーマ展「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」

12月５日(日)～平成23年２月27日(日)　特別展示室

岩手の大地の物語は日本列島生成の歴史を表しています。車窓の景色、観光地の景観にある地質学的背景、何げない崖に潜む驚異の自然の歴史。さあ、地球の歴史を読み解く旅に出かけよう。

●展示解説会　14:30～15:30　特別展示室　要入館料
12月５日(日)、１月16日(日)、２月20日(日)

●関連事業
日曜講座　13:30～15:00　教室　当日受付・聴講無料　一般対象
平成23年１月９日(日)「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」
講師：大石雅之（当館学芸第一課長）

■テーマ展「くらしと古文書」

平成23年３月19日(土)～５月８日(日)　特別展示室

今に伝えられた昔の書類は「古文書（こもんじょ）」とよばれ、人々の生活の一端を教えてくれます。

江戸時代から明治時代頃の古文書を通して、人々の生活の様子や現代と違った習慣などをさぐってみようとする企画です。

借用証文　江戸時代　当館蔵

●展示解説会　14:30～15:30　特別展示室　要入館料
３月21日(月・祝)、５月３日(火・祝)

●関連事業
日曜講座　13:30～15:00　教室　当日受付・聴講無料　一般対象
平成23年３月27日(日)「くらしと書き物　昔と今」
講師：阿部勝則（当館学芸員）

講座・講演会等

●冬期文化講演会　当日受付　聴講無料
平成23年２月３日(木)　13:30～15:30　講堂
「宮澤賢治の地的世界」
講師：加藤碩一氏
（産業技術総合研究所・地質調査総合センター代表）

●文化財等取扱講習会　平成23年２月２日(水)～２月４日(金)
県内各市町村教育委員会文化財担当職員、県内博物館等職員を対象とした講習会です。要事前申込、定員60名、詳細は博物館までお問い合わせください。

●県博日曜講座
第2・第4日曜日　13:30～15:00　当日受付　聴講無料
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
12月12日「大正～昭和初期の平泉発掘事情－小田島コレクションからわかること－」木戸口俊子（当館学芸員）
12月26日「写真家・土門拳と中尊寺」佐々木一成（当館副館長）
※１月９日はテーマ展「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」関連講座
１月23日「保存と修復の歴史－出土木製品を中心に－」
木戸脇直（当館学芸員）
２月13日「県南部に分布する火山灰」吉田　充（当館学芸員）
２月27日「標本はおもしろい～岩手の植物再発見～」
鈴木まほろ（当館学芸員）
３月13日「岩手の地名に日本語の源流をたどるⅡ」
菊池　慧（当館館長）

週末の催し

◆ミュージアムシアター
毎月第１土曜日 13:30～　１時間30分程度 講堂 当日受付 視聴無料
童話や昔話、感動の物語を上映します。　（　）内は対象。
12月４日　フランダースの犬〔103分〕(小・中学生、一般)
２月５日　ふるさとーＪＡＰＡＮ－〔98分〕(一般)
３月５日　魔法の指輪〔28分〕、長靴をはいた猫〔24分〕、のら猫と金魚〔10分〕、木龍うるし〔20分〕(小・中学生、一般)

◆チャレンジ！はくぶつかん
毎月第2・第3土曜、日曜、祝日　小学生向け　随時受付
チャレンジ！マークをさがして はくぶつかんをたんけん！
12月11日・12日・18日・19日　　テーマ：魚
１月８日・９日・10日・15日・16日　　テーマ：風
２月12日・13日・19日・20日　　テーマ：骨
３月12日・13日・19日・20日・21日　　テーマ：海

◆みんなでためそう！体験教室
毎週日曜日　13:00集合～14:30　小学生20名程度　参加無料
※未就学児の場合は保護者同伴。希望者多数の場合は抽選。
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験し、昔のくらしや身のまわりの自然にふれてみましょう。(※印は外部講師プログラム)

12月	１月
５日 松ぼっくりのXmasツリー	９日 みずきだんご
12日 たこづくり	16日 こはくの玉づくり
19日 まゆでうさぎづくり	23日 石のオリジナルはんこ
26日 ペーパーかどまつ	30日 土偶づくり
２月	**３月**
６日 ほかほかカイロづくり	６日 化石のレプリカづくり
13日 かけじくをつくろう	13日 ヨーヨーづくり
20日 入浴剤づくり	20日 へん光万華鏡
27日 はまぐりのおひなさま	27日 すみながし

お知らせ

●年末年始の休館　12月29日(水)～１月３日(月)

定時解説

日曜日を除く毎日　13:30～14:30
解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員がご質問や解説のご希望におこたえしています。

バスのご案内

■盛岡駅（11番のりば）または盛岡バスセンター（中三前）より「松園バスターミナル」行き乗車、終点で下車し、「②こども病院・北アパート回り」または「③県立博物館・北アパート回り」、「⑥松園循環バス右回り」に乗り換え、「県立博物館前」下車。徒歩３分。
※松園バスターミナルからは徒歩15分です。
■盛岡駅（11番のりば）より「松園営業所」行き乗車、「西松園二丁目」下車。徒歩５分。

利用のご案内

■開館時間　9:30～16:30(入館は16:00まで)
■休 館 日　月曜日（月曜が休日の場合は開館、翌平日休館）
資料整理日（９月１日～10日）
年 末 年 始（12月29日～１月３日）
■入 館 料　一般300(140)円・大学生140(70)円・高校生以下無料
(　)内は20名以上の団体割引料金

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより
第127号
平成22年12月１日発行

編集　岩手県立博物館
〒020-0102　盛岡市上田字松屋敷34
Tel.(019)661-2831/Fax.(019)665-1214
発行　財団法人岩手県文化振興事業団
〒020-0023 盛岡市内丸13-1
Tel.(019)654-2235/Fax.(019)625-3595

岩手県立博物館だより

Newsletter of the Iwate Prefectural Museum
岩手県立博物館ホームページアドレス
http://www.pref.iwate.jp/~hp0910/
2010.12 No.127

目次／テーマ展「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」より **表紙**／いわて文化ノート **p.2－3**／展覧会案内「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」**p.4－5**／活動レポート **p.6－7**／インフォメーション **p.8**

北上山地の石炭紀層状石灰岩（白尾元理氏撮影）　大船渡市日頃市町鬼丸

厚さ20～30cmの成層した石灰岩が左方へ傾斜して重なっています。中国南部でも見られる貴州サンゴが含まれ、陸源の泥や砂の薄層がはさまっていることから、この地層は揚子地塊（南中国となる大陸の断片）近辺の陸域に近い干潟や浅海の堆積物であったと考えられています（テーマ展「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」から）。

岩手県立博物館テーマ展

「大地（ジオ）を楽しむ旅へ」

12月5日(日)～2月27日(日)　特別展示室

■いわて文化ノート

商業デザイナー荒川文助の仕事

はじめに

消費者を一目で引きつけるデザインは「商業デザイナー」によって生み出されます。ここでは、多彩な作品を発信し、岩手のデザイン界をリードした荒川文助というデザイナーの足跡を、その作品とともに紹介いたします。

荒川文助は大正２年（1913）盛岡市に生まれました。盛岡中学校(現在の岩手県立盛岡第一高等学校)に入学後は絵画倶楽部に所属しました。在学中は商業美術の作品を校内で発表するなど、商業デザイナーとしての基礎が形作られた時期と言えます。東京美術学校（現在の東京芸術大学）を志したものの断念します。昭和８年（1933）に１年遅れで盛岡中学校を卒業しました。

図案家としての第一歩

中学校卒業と同時に荒川は岩手県試験場図案部（現在の岩手県工業技術センター）に入ります。勤務の傍らで商業美術の専門誌である『広告界』に試作品を発表しています。この雑誌は昭和元年（1926）に創刊され、太平洋戦争開戦の昭和16年（1941）まで、商業美術に関する最新の情報を発信し続けました。荒川文助のように地方を中心に活動するデザイナーにとって、『広告界』は中央のデザイン界の動向を知ることができるバイブルのような存在であったといえます。商業デザインの世界で一歩を踏み出した荒川にも大きな影響を与えました。

昭和９年（1934）には盛岡広告研究会を発足させ、他のデザイナーと切磋琢磨しながら、新たなデザインを模索していきます。

商業デザインの創作を行う一方で、水彩画の作品も残しています。盛岡の風景を淡い色彩で描いた、「早春」（写真１）は

写真１　早春
（昭和８年（1933））

何気ない風景の中に差し込む光を印象的に表現した作品です。

独立後の活動

昭和10年（1935）に岩手県工業指導所を退職した荒川は翌年、「盛岡広告研究会」を発展させる形で「盛岡商業美術作画協会」を結成します。盛岡を中心に活動する商業デザイナーからなるこの集団は毎年１回の割合で定期的に展覧会を開催しました。また、ポスターの試作展も行いました。これらの取り組みは、デザイナー同士の技術の向上に大きな役割を果たしました。昭和12年の『岩手日報』にはこの年の会の活動スケジュールが掲載されています。それによると、２月から１か月交代で11人のデザイナーが盛岡市内の呉服店を舞台にショーウィンドーの試作品を発表するという、実験的な試みを行っていることが分かります。

荒川の試作品（写真２）は、満月に照らし出された着物姿の女性のシルエッ

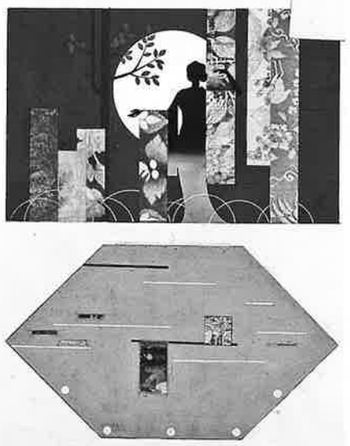

写真２　呉服店配置図
（昭和12年（1937））

トを中心に据えた配置図を作成しています。横から見た様子とともに、上から見た配置図も併せて描かれています。

荒川文助の仕事は、ポスターのように平面的なものだけでなく、ショーウィンドーやレストランの看板（写真３）など、立体的なものも数多く含んでいます。この時期、「第１回全日本商業美術展」に５作品が入賞しています。

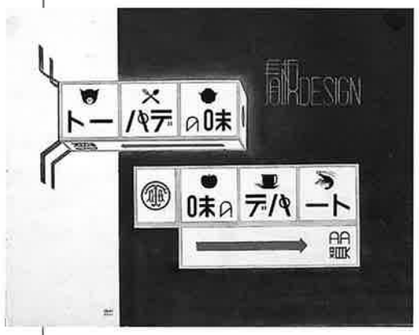

写真３　レストラン看板デザイン
（昭和14年（1939））

戦争の影響

荒川文助がデザイナーとして本格的に歩みだした時期は日本が日中戦争、太平洋戦争という２つの戦争へ突入していく時期と重なります。彼の作品もまた、

写真４　ポスター　東亜新秩序建設
（昭和14年（1939））

戦意高揚を目的とした内容へと変化していきます。ポスター「東亜新秩序建設」（写真４）は日本がアジア諸国の中心として、欧米諸国に対抗する新たな存在感を示そうとしていた時期の作品です。

依頼主へ作品を提供する限り、その作品が時代の影響を受けることは避けられません。しかし、ポスターを見る人に一目で強い印象を与える荒川文助の作風は、たとえ戦時中のものであっても、変わることがありませんでした。

写真５　花巻温泉郷
（昭和28年（1953））

新たな活動、新たな作品

太平洋戦争後、荒川文助の活動は再び、商業デザインへと戻っていきます。終戦間もない昭和20年（1945）には「全日本観光ポスターコンクール」に入賞しています。この時期、荒川は各地の観光ポスターを数多く手がけています。特に、平泉や温泉など、岩手県内の観光地のポスターを作成しています。一方、日めくりカレンダーの台紙（写真６）など、さまざまな商業デザインを手がけ、創作活動の幅広さを示しています。

この時期は個展を開催するなど、個人の活動を活発に行う傍らで、新たな活動も立ち上げています。これまで盛岡のデザイナー中心に活動を展開してきた「盛岡商業美術作画協会」に仙台のデザイナーを加えて、新たに「東北図案美術協会」を結成しました。これにより、デザイナー同士のネットワークがより広がっていきました。

写真６　カレンダー台紙
（昭和25年（1950））

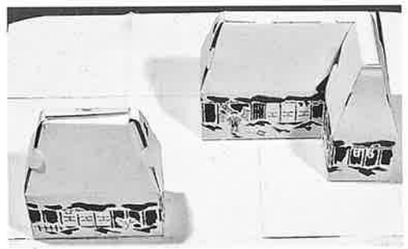

写真７　菓子パッケージ（立体）

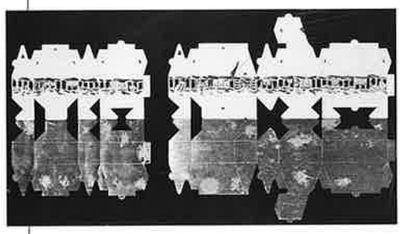

写真８　菓子パッケージ（平面）

荒川文助のメッセージ

さまざまな商業デザインを手掛けてきた荒川ですが、昭和28年（1953）に新たに会社を設立すると、約10年間社長としての職務に専念し、デザインから遠ざかることとなります。デザイナーとしての活動を再開させると、菓子の包装紙やパッケージなどの新たなデザインを手がけました。特に、菓子のパッケージについては、曲がり家をモチーフにするなど、独創的なデザインを生み出しました。（写真７、８）

実用性を重視した新たなデザインに対して「岩手県包装デザイン展」で最高賞などを受賞しています。

岩手のデザイン界をリードした荒川文助は同年66歳で亡くなりました。生前に「価値を決めるのは消費者であり、消費者は厳正な審判者である」というメッセージを残しています。この言葉は、デザイナーは商品を手に取る消費者の立場に立ってデザインをしなければならないという決意を表したものといえます。

（学芸調査員　原田祐参）

■テーマ展

大地（ジオ）を楽しむ旅へ

会期　平成22年12月５日(日)～平成23年２月27日(日)　　会場：特別展示室

図１　北東北の「宙瞰図」．宇宙から眺めたようなこの写真は，「地球観測衛星」の画像から作成されたコンピュータ・グラフィックス（CG）です（神奈川県立生命の星・地球博物館新井田秀一氏作成）．

図２　宮澤賢治が手にして勉強したと考えられる地質学の専門書（岩手大学図書館所蔵）．

「安山岩を割ったら、そこには宇宙があった！」。花巻の北上川の河原にある石をハンマーで割り、そう言って感動した人がいます。なるほど、黒っぽい石基の中に散らばる白い斜長石の斑晶は星雲に見えるではありませんか。

わたしたちが岩手の地質に親しみ、楽しむためにはどうしたらよいのでしょうか。まずは、旅行したときの車窓から山々や何げない崖を見つめ、そこに潜む驚異の自然の歴史について考えてみましょう。そして、観光地の景観を際立たせている地質学的背景を知り、地球の歴史を読み解く旅に出かけましょう。

■ ジオの科学のはじまり

最近、岩手大学の図書館で重要な資料が「発見」されました。それは、明治時代のはじめに来日して日本の地質学の基礎を築き上げたドイツ人地質学者のエドムント・ナウマンによる東北地方最古の地質図（1886年発行）と盛岡高等農林学校に在学（1915～1918年）していた宮澤賢治が確実に手にして読んだと考えられる地質学の専門書です。どちらも岩手大学図書館に大事に保管されていたのですが、地質学者や宮澤賢治の研究家がごく最近までその存在に気づかなかったという意味で、それは「発見」といえます。こういった専門書で勉強した宮澤賢治は、関豊太郎教授の指導で級友たちと盛岡周辺の地質調査を行って、地質図と報告書を残しています。その報告書にこんな一節があります。

「閑散なるの日一鎚を携えて山野に散策を試みんか…欧米には地質案内記の刊行せられたるもの多く、婦女子に至るまで之を携えて或いは山岳を攀ぢ或いは原野を彷徨するもの多しと聞き…」。

これは、今日のジオツーリズムの考え方に通じています。岩手の地質がまだあまり詳しく調査されていなかったころに、すでにこういった先見性のあることを考えていた人たちがいたことに驚かされます。

■岩手のジオの世界へ

それでは、「ジオ」とは何でしょうか。英語で地質学は「ジオロジー」、地理学は「ジオグラフィー」です。つまり「ジオ」とは「大地」や「地球」を表す言葉です。

岩手のジオの特徴は、ひとことでいうと「地質学的多様性」です。岩手県には、生成した時代の異なる２つの山々、北上山地と奥羽山脈があるために、５億年ほど前の古生代カンブリア紀から最も新しい地質年代である新生代第四紀（259万年前～現在）にいたるまで、「紀」のレベルの地層や岩石がすべてほぼ連続的に分布しているのです。

図３　北上山地の謎にせまる、巨大なざくろ石を含むホルンフェルス．大船渡市三陸町綾里産．横約30cm．

ひとつの県で、カンブリア紀から第四紀までの地層や岩石、そして化石から火山までの多様な地質現象を見ることのできるのは、岩手県をおいて他にありません。岩手県の各地をめぐることによって、５億年分の時間旅行ができるのです。

ナウマンの地質調査から今年で129年。岩手県の地質は調べつくされたかといえば、そうではありません。最近でも、いくつもの新しい発見がなされています。

■旅行でジオを楽しむ

専門的な研究というような難しいことを考えなくても、まずは気楽に風景を眺めてみましょう。東北新幹線から見える箱ヶ森、赤林山、南昌山、東根山はどのようにしてできたのでしょうか。北上山地を車で旅行すると鏡岩とよばれる切り立った石灰岩の岩肌にしばしば出くわします。風化から取り残された花崗岩は、面白い岩の造形を見せてくれます。夫婦岩とよばれる岩も各地にあります。

車窓の地質を楽しむ鉄道の旅を「ジオ鉄」といいます。たまには、あなた自身の「ジオ鉄」を楽しんでみてはいかがでしょうか。

図４　最近新たに発見された、謎の哺乳類デスモスチルスの臼歯化石．一戸町女鹿産．横約6.5cm（当館所蔵）．

図５　石灰岩鉱山とJR大船渡線の列車．一関市東山町陸中松川駅付近．

■地質写真家が見た日本列島の20億年

日本最古の年代を示す岩石は岐阜県にありますが、古生代のはじめから現在にいたるまでの５億年間の岩手の大地のおいたちは、そのまま日本列島生成の歴史でもあります。

それでは、今度は日本列島各地に目を向けてみましょう。東京都在住の地質写真家の白尾元理さんは、日本や世界各地の地形・地質を撮り続けています。白尾さんの写真は、日本列島生成の壮大なドラマをみなさんに語りかけてくれます。

■ジオパーク

近年、地形や地質などの地球がもつ自然の資産を広く一般の人々が知り、活用する動きが世界中で広がっています。ジオパークとは、地球活動の遺産をおもな見所とする自然の中の公園です。日本国内の世界ジオパークとして、「洞爺湖有珠山」「糸魚川」「島原半島」「山陰海岸」が認定されています。

岩手県でも、三陸海岸をジオパークにしようとする動きが始まっています。

図６　日本最古の岩石を含む上麻生礫岩（白尾元理氏撮影）．岐阜県七宗町の飛騨川の渓谷に見られる上麻生礫岩には、日本最古の20億年前の片麻岩が含まれている．

図７　１億2000万年ほど前の地層が直立する普代村黒崎．岩手県の三陸海岸でも「ジオパーク」をめざす活動が始まった．

（学芸第一課長　大石雅之）

▼展示解説会
平成22年12月５日(日)、平成23年１月16日(日)、２月20日(日)14:30~15:30

▼県博日曜講座
平成23年１月９日(日)13:30~15:00

▼講演会
平成23年２月３日(木)13:30~15:30
「宮澤賢治の地的世界」
加藤碩一氏（産業技術総合研究所）

■北東北三県共同展「境界に生きた人々～遺物でたどる北東北のあゆみ～」関連事業

関連講座と考古学セミナー講演会と現地見学会

平成22年７月25日(日)・８月８日(日)・８月21日(土)・８月22日(日)

〔関連講座①〕７月25日

講師：大阪府文化財センター理事長（奈良大学名誉教授）水野　正好　氏

演題：「東北の雄　阿弖流為（アテルイ）とその周辺」

水野　正好　氏

盛岡市料内（しだない）遺跡出土の大型土偶や、紫波町西田遺跡などを例に東北地方は優れた縄文文化の花開く土地であったことの紹介に始まり、倭国の誕生や邪馬台国論争を例に国家の枠と外との地域の交流や、藤原氏と鹿島・香取両神宮を通しての東国とのつながり、奈良の大仏に使用した金を発見した百済王家（くだらのこにきしけ）と陸奥国と蝦夷征討とのかかわり、坂上田村麻呂が戦争を好んでいなかったことなど、盛り沢山の内容で、随所に水野流視点の解釈が溢れていました。独特の語り口で満員の聴衆を魅了していました。(130人)

〔考古学セミナー講演会〕８月８日

講師：秋田県立博物館名誉館長（秋田大学名誉教授）新野　直吉　氏

演題：「北東北初期武家時代の覇者たち」

新野　直吉　氏

続縄文文化が弥生文化より劣っている、遅れているというのではなく、その気候風土にあった暮らしやすい生活をしていたため斑状（まだら）に縄文文化が残るほど東北地方には合っていたことを力説されていました。いわゆる「北の王者」のような表現は、安倍氏や清原氏、奥州藤原氏が中央の政府から独立して成立していたかのような錯覚を抱かせているが、実は国家の枠組みのなかで地方官僚として活動していたのであり、文学的表現を歴史学に持ち込んではいけないし、奥州合戦であっけなく奥州藤原氏が敗れ去るのも、平泉が武家政権の拠点ではなく、仏都であったことの証明だと解説されました。(110人)

〔考古学セミナー・現地見学会〕

８月21日　金ヶ崎町の鳥海柵跡

横手市清原氏関連史跡

国見山廃寺や胆沢城との位置関係を確認しながら鳥海柵跡を見学し、秋田道走行中も沿道の遺跡について鎌田学芸員の説明がありました。心づくしの浅舞酒造の蔵人賄料理を昼食にいただき、沼柵、平安の風わたる公園（雁の乱れの擬定地）、金沢柵の陣立や大鳥井柵を見学した。雄物川の氾濫状態を想像し、平安の風わたる公園では、銅像と系図の場所で、藩主佐竹家への尊崇の念から、祖先にあたる源義家の顕彰や八幡神信仰はさかんなのに、清原氏に対する興味関心はまだまだ薄いという話を聞きました。陣立の周囲をめぐりその規模を実感し、実際に発掘調査を担当している横手市教育委員会の島田祐悦さんに、丁寧で、わかりやすい説明を受けました。炎天下、急ぎ足ながら、各所ともに堪能いただけた様子でした。申し込みが殺到するほどの人気でした。(41人)

〔関連講座②〕８月22日

講師：日本大学教授　関　幸彦　氏

演題：「奥州合戦について」

関　幸彦　氏

坂東（ばんどう）（現在の関東地方）に勢力を扶植していた桓武平氏に比べて、基盤のなかった清和源氏は、垂涎の地・奥羽（現在の東北地方）を戦（いくさ）という強硬手段をつかってでも手に入れたかった。簡単に我が物にならなかったからこそ執念が募ったことなどを解説されました。前九年合戦は頼義が鎮守府将軍兼陸奥守で、安倍氏追討の官符を得て戦った公の戦だったが、後三年合戦は義家が鎮守府将軍兼陸奥守でも、清原氏追討の官符は得られず、公私半ばの状態。奥州合戦は公的官職が一切ない頼朝が、追討の官符なく泰衡を討つという全くの私戦だったので、頼義以降、一度として源家の家人になったことがない奥州藤原氏を家人扱いして、泰衡を討伐し、主人が家人を成敗しただけだと家人成敗権を主張して正当化したのだと説明してくださいました。このことが、奥州を完全に組み入れて、日本に至尊（天皇を頂点とする朝廷）と至強（将軍を頂点とする幕府）の二つの軸のある楕円状の国家をつくりあげたと持論を展開されました。(182人)

（主任専門学芸員　佐々木勝宏）

■事業報告

岩手県立博物館開館30周年記念特別企画展「いわての漆」

平成22年10月２日(土)～11月７日(日)

岩手県立博物館は、昭和55年（1980）10月５日に開館し、今秋開館30周年を迎えました。これを記念して、10月２日から11月７日まで特別企画展「いわての漆」が開催されました。10月２日の開会式には、宮舘壽喜副知事、佐々木一榮県議会議長にご参列いただき、テープカットを行って開幕しました。

10月２日　開会式　テープカット

「いわて文化史展示室」を第一会場、

第一会場の様子

「特別展示室」を第二会場として、縄文から現代までおよそ400点の資料を展示した「いわての漆」展。10月３日･10日･11日・24日・11月７日に秋期セミナー、11月３日にシンポジウムを開催し、10月30日～11月３日には漆掻きの実演も行われました。

期間中の来館者は6,631人。様々な資料の展示と関連事業を通して、岩手の漆

第二会場の様子

に関わる最新の研究成果や漆の魅力を多角的にご紹介できたのではないかと思います。本展の開催が、これからの「いわての漆」の振興に少しでも貢献できたなら幸いです。

展覧会の開催にあたりましては、多くの方々にご協力をいただきました。あらためて心より厚く御礼申し上げます。

（学芸第一課　齋藤里香）

■事業報告

第３回岩手県立博物館まつり

平成22年10月17日(日)

10月17日(日)に「うんとたのしもう!!わくわくはくぶつかん!!」をテーマに、岩手県立博物館まつりが開催されました。

小学生を主な対象とし、教育普及活動の一環として行われてきた博物館まつりも今年で３回目を数えます。本年度の目玉事業である開館30周年記念特別企画展と平行しての開催となりましたが、多くのボランティアスタッフの支えもあり、2,000人ほどの来場者の皆様をお迎えしての一大イベントを無事終えることができました。

当日は朝から時折雨も見られるなど、

決して好天と言えない中にも関わらず、９時の開場時間には多くのお客様が列を作っていました。普段は落ち着いた雰囲気の博物館ですが、各コーナーの開始とともに、館内外に広がるまつりの会場は一気に活気づきます。

人気が殺到する「こはくの玉づくり」など定員があるコーナーの申し込みのためにできる大行列、「火山の噴火実験」を食い入るように見つめる子どもたち、親子で力を合わせて挑戦する「火おこし」、南部曲がり屋での昔あそび体験で作られ、会場のあちこちで鳴り響くイタドリ笛。

10種類の体験学習コーナーに加え、曇天を吹き飛ばすような鮮やかな花を今回のまつりに添えてくれたのが、現在毎日のようにテレビ・ラジオでその歌を耳にする「underpath!」のお二人と、岩手大学の郷土芸能サークル「ばっけ」の皆さんのフレッシュな演舞でした。

各コーナーへ一目散に飛び込んでいく子どもたちの中には、彼らに詰まった知的好奇心の輝きが見えます。その姿を見ていると、自分も同じように小学生のころ初めて親に連れられ、この博物館を訪れた時のことが想起されました。

参加してくれた子どもたちが、これからも長い歩みを続けていくであろう当館と生涯をとおして関わっていく、その契機に今回のまつりがなったとすれば、我々運営するスタッフにとってこれ以上嬉しいことはありません。

（学芸第三課　目時　和哉）